

Karin Boye の詩作に見られる『木』というモチーフをめぐって

Motivet ”träd” genom Karin Boyes diktning

スウェーデン語専攻 4 年 片井優花

I. テーマ設定とその意義

カーリン・ボイエ(Karin Boye, 1900-1941)はスウェーデンを代表する詩人のひとりである。彼女は詩の中で木をはじめとする植物を重要なモチーフに据えることが多いことで知られており、それを踏まえ本研究では詩における「木」(träd)というモチーフに注目してその表象するものを分析した。この卒業論文を通し、ボイエの詩の魅力や精神世界に迫るとともに、いまだ日本にほとんど紹介されていない彼女を少しでも日本の読者へ彼女を紹介することを目的としている。

II. 研究方法

ボイエの生前に出版された詩集 4 冊と死の直後に出版された『七つの大罪』の中から”träd”という単語を含む詩を抽出し、さらにその中から「木」というモチーフをその詩における中核に据えていると考えられる詩 6 篇を選んだ。「木」”Trädet”、「もちろん痛い」、「Ja visst gör det ont」、「地面の下の木」”Trädet under jorden”、「太陽への祈り」”Bön till solen”、「木々」”Träden”、「いかにして信頼は生きられようか」”Hur kan förtröstan leva?”である。これらの詩ひとつひとつをスウェーデン語から翻訳し、詳細な分析・解釈を行った。

III. 結論

ボイエの詩作における「木」について特徴的であるのは、その「神秘性」ではないかと結論付けた。木は一般的に「成長力」や「豊穡」、「生命力」といったものに結び付けられることが多く、これは本稿で扱った 6 篇においても同様である。しかしボイエは決して、安直には木を歓喜へと向かう動的なエネルギーに結び付けない。むしろボイエが木に与えるのは非常におだやかで静的・かつ両義的なイメージであり、そしてそのようなイメージは木に「神秘性」を与えているのだ。既存の概念が次々とつくりかえられていく動乱の時代を生き抜いたボイエにとって、木とは信頼できる、俗世を超越した大いなる存在だったのかもしれない。

IV. 今後の課題

今後より深めていくべき点としては、「木」に関連する他のモチーフの分析や、「木」が表象するものの時期による変遷の追求が挙げられる。本稿では「木」に焦点を絞って詩を分析したが、ボイエの「木」を取り巻く世界観にさらに迫るには、関連して登場する他の一例えば「天」「地」といったモチーフについても詳細に検討する必要があると感じた。また、扱った詩の少なさゆえに時期による表象の変化は十分に追うことができなかった。今後は具体的な樹木を扱っている詩にも範囲を広げ、さらに「木」というモチーフに迫っていきたい。